

研究拠点形成事業 平成26年度 実施計画書

A. 先端拠点形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	北海道大学アイヌ・先住民研究センター
(カナダ)拠点機関：	アルバータ大学
(連合王国)拠点機関：	アバディーン大学

2. 研究交流課題名

(和文)：北方圏における人類生態史総合研究拠点

(交流分野：考古学、人類学、生物学、環境科学)

(英文)：Advanced Core Research Center for the History of Human Ecology in the North

(交流分野：Archaeology, Anthropology, Biology, Environmental Science)

研究交流課題に係るホームページ：[http:// http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~e20623/north/](http://http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~e20623/north/)

3. 採用期間

平成25年4月1日 ～ 平成30年3月31日

(2年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

実施組織代表者(所属部局・職・氏名)：アイヌ・先住民研究センター・センター長・
常本照樹

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：アイヌ・先住民研究センター・教授・
加藤博文

協力機関：琉球大学大学院医学研究科、東京大学総合研究博物館

事務組織：北海道大学国際本部国際連携課、文学部事務部

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：カナダ

拠点機関：(英文) University of Alberta

(和文) アルバータ大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Department of Anthropology, Professor,
Andrzej WEBER

協力機関：(英文) なし

(和文) なし

経費負担区分 (A型)：パターン2

(2) 国名：連合王国

拠点機関：(英文) University of Aberdeen

(和文) アバディーン大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Department of Archaeology, Professor,
Keith DOBNEY

協力機関：(英文) Oxford Centre for Asian Archaeology, Art and Culture, School of
Archaeology, University of Oxford.

(和文) オックスフォード大学考古学系オックスフォードアジア考古学・芸術・
文化センター

経費負担区分 (A型)：パターン1

5. 全期間を通じた研究交流目標

人類は、生理学的に熱帯型の生物であるにも関わらず、既に4万年前には北緯70度の北極圏にまで到達した。その動きは解剖学的現代人の出現と拡散の動きと連動する。250万年前のホモ属の人類史において農耕出現以降の歴史は、わずか1万間に過ぎず、その大半は狩猟採集民の歴史であった。狩猟採集民社会の人類史の解明は、すなわち我々現代人の進化的位置付けを解明することになる。しかし、従来人類史は中緯度の国家史・文明史中心の叙述であり、狩猟採集社会は、その初源的生活様式としての位置付けにあまじってきた。

北海道大学を中心とした研究チームでは、2011年からアルバータ大学、アバディーン大学などとの間で北方圏に展開する狩猟採集民社会の環境適応行動の特性とその独自の歴史の変遷過程を解明する目的で考古学、古環境学、分子生物学、人類学などの領域横断型のプロジェクトを組織、スタートさせた。本事業では、北方圏の狩猟採集民の人類史の中でも、北海道島周辺の変動する自然環境とその中で営まれた人類環境史の独自性と多様性を解明していく。本研究の中核には北海道をフィールドとした複数国の研究者、若手研究者が参加する国際フィールドスクールを企画実施し、中核的研究拠点の役割を果たす3大学の施設を活用し、単独の大学機関ではカバーできない研究手法や研修制度を国際共同として実施していく。特に1) 国際フィールドスクールでは、異領域の研究手法の統合と研修機会の提供、研究者交流の場を提供する。2) 国際セミナーにおいては、最先端の調査研究手法と研究機材の使用法の習得の機会を提供する。3) これら国際共同研究を通じて、若手研究者の研究機関を超えた指導体制、共同研究の枠組みを構築する。

6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

<研究協力体制の構築>

(1) 国内の研究協力体制の構築

平成 25 年度は、国内の参加研究者間での研究目標、課題の共有を図るために、全体会議を 2 度開催し、多領域の研究者が共同研究を展開するための組織作りを重点的に行った。この全体会議を通じて、複数の個別研究テーマをプロジェクト全体の包括的なテーマやグラウンド・セオリーづくりにより有機的に結びつける方向性をメンバー内部で共有することが可能となった。また秋の全体会議を日本人類学会のシンポジウム企画と合わせて開催することによりプロジェクトの取り組みを学会において提示する機会を得ることができた。

(2) 海外の研究拠点との研究協力体制の構築

アバディーン大学との間に大学間交流協定を両大学のコーディネーターが主導して締結することができた。これによりプロジェクトの運営をより大きな大学間の交流の枠組みの下で進めることが可能となった。またオックスフォード大学オックスフォードアジア考古学・芸術・文化センターとは、同様にコーディネーター間が主導して部局間交流協定の締結を終え、今年度のセミナー開催に向けた安定した関係づくりが着実に進んでいる。

<学術的観点>

(1) 環境適応行動に関する国際討議

オックスフォード大学において、安定同位体分析と高精度年代測定に関するセミナーを開催し、局地的な地域集団の系統性や環境適応行動の解明に大きな役割を果たす地域的バイアスについての共同討議をおこなった。ヨーロッパやアフリカを中心にユーラシア各地の分析データが集積し、国際共同研究を主導しているオックスフォード大学の考古学研究所のメンバーとアジア地域の分析データの蓄積が進む東京大学総合研究博物館メンバーとのコラボレーションは、国際的データ解析の次のステップを予期させる充実した成果をあげることができた。

(2) 生活資源の家畜化と海洋適応に関する国際討議

アバディーン大学においては、人類と動物の相関史をテーマとするセミナーを開催した。野性動物の家畜化をめぐる議論は、ヨーロッパ、アジアのみならず、南太平洋を含めたグローバルな集団移動と拡散を具体的に立証する基礎資料となることが明確に提示され、今後当該プロジェクトの枠を越えたより大きな国際的な共同研究へ発展される方向性が示された。方や日本を含めたアジアの基礎データが世界的に蓄積されているデータベース化において十分に情報発信されておらず、この領域の連携の強化が今後の課題となった。

(2) 国際会議での議論

国際学会としては、アメリカ考古学会（4 月）、国立民族博物館（1 月）、国内学会では日本人類学会において個別発表またはプロジェクトの独立シンポジウムを開催し、国内外に本プロジェクトがスタートしたことを広く周知することができた。本プロジェクトの目指す「北方圏における人類生態史」という概念、集団移動や適応行動の理論研究に多くの関心が寄せられ、研究の連携をもとめる動きや国際誌への論文投稿依頼やレクチャー、セミ

ナー企画が広がっていることは大きな成果である。

<若手研究者育成>

(1) 若手研究者育成のためのプログラム

セミナーの中でも中核的な役割とし位置づけた国際フィールドスクールを中心に数多くの大学院生、ポスドクが参画し、カナダや連合王国の院生およびポスドクとの研究交流を促進させた。また国際フィールドスクールの実施された礼文島浜中2遺跡の考古学的調査からは、多くの新資料が得られ、関連領域の若手研究者の学位論文作成の重要な基礎資料となることが期待される。さらに国際フィールドスクールでは、ランチョン・ミーティングにおいて日本、カナダ、アメリカの第一線の研究者による若手研究者向けのレクチャーが実施され、国際的な研究動向に直接触れる機会を提供できた。

国際フィールドスクール以外では、日本と連合王国で開催されたセミナーの参加者の半数がポスドクや大学院生であった。セミナーにおいては、若手研究者が論文構想や研究計画について国内外の第一線の研究者から直接、指導やコメントを受ける機会を創出することができた。これらの成果については、2年度目以降に本プロジェクトの成果としての個々の若手研究者の論文発表として発表される予定である。

(2) 海外の研究機関での大学院生向け教育活動

研究機関における大学院生向けの教育プログラムとしては、オックスフォード大学において日本側3名の教員による計3回の講義提供と大学院生に対する日本考古学や北方圏の人類史に関するチュートリアル(Hilary termにおいて)をおこなった。チュートリアルに参加した大学院生は、平成26年度の国際フィールドスクールへの参加を希望しており、チュートリアルから国際フィールドスクールの参加へという一連の流れができつつある。

またアバディーン大学におけるセミナーでは、JSPS ロンドン研究センターと連携し、セミナー終了後にJSPS 派遣プログラムの説明会を開催した。取り組みの成果としては、プロジェクトに参加したアバディーン大学とオックスフォード大学の大学院生からJSPSの派遣プログラムへの応募希望者が出ている。

(3) 大学院生組織の設置

研究者主導の国際共同セミナーに加えて、プロジェクトに参画する大学院生が独自に連携し、研究計画や研究機関間の交流を促進するために大学院主導の研究グループを組織した。具体的な活動は、2年度目以降となるが、大学院生の企画によるセミナーの実施や先端研究を推進する研究機関や研究者を訪問してインタビューを行い、研究をレビューする事業を計画する。

<その他(社会貢献や独自の目的等)>

(1) 地域社会との連携(パブリック考古学)の実践

礼文島における国際フィールドスクールの展開は、研究・教育効果に加えて、地域における文化遺産の位置付けの見直しに大きな刺激を与えた。国際フィールドスクールを通じて地域社会や地元自治体内部に地域の文化遺産が国際交流の資源となる文化資源であると

いう意識が明確に定着した。礼文町では、文化遺産を管理する教育委員会の枠を越えて、町長以下、産業振興課を含めて町全体の産業振興と連携させた将来計画を議論する動きに発展している。現在北海道大学と礼文町との間において、本事業を中核とし、さらに高山植物に関わる植物学や総合的に地域振興策を検討する観光学の領域を巻き込んだ包括連携協定の締結にむけた動きが進んでいる。

（２）国際的な先住民文化遺産の理解促進

先住民文化遺産の位置付けと評価をめぐる議論は、国際的な広がりを見せている。本事業の取り組みについて、10月にウプサラ大学（スウェーデン）で開催された「先住民文化遺産と先住性」に関する国際シンポジウムにおいて日本におけるアイヌ文化遺産の位置付けと国際比較の可能性を報告した。先住性をめぐる議論は、連合王国を含むヨーロッパやとりわけサーミ民族をかかえる北欧諸国とも共通する課題を見いだすことができる。3月にウプサラ大学で行った本プロジェクトの取り組みについて講演では、言語学や環境学など多領域の研究者から高い関心を向けられ、サーミ民族のメンバーからも北欧での事業との連携や意見交換の提案を受けることができた。地元、北海道においては、北海道アイヌ協会と連携して研究成果の地域社会や高等教育への還元を積極的に実施している。

7. 平成26年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

平成25年度に引き続き、海外研究拠点との間での共同研究の中核となる理論的課題の検討と共同研究の枠組みの構築するためのセミナーを企画実施する。国際交流の枠組みとしては、以下の事業を展開する。

- （１） アルバータ大学（カナダ）における「北方圏の人類生態史」に関するセミナー
- （２） オックスフォード大学（連合王国）における「先住性と先住民文化遺産」に関する国際シンポジウム
- （３） アバディーン大学（連合王国）と連携した北方人類学や先住民考古学に関する研究集会（札幌）を北海道大学のサスティナビリティ・ウィークの一環として実施
- （４） 新たな研究者交流を促進するためにイースト・アングリア大学（連合王国）でのセミナー
- （５） イルーツク大学（ロシア）やウプサラ大学（スウェーデン）、グローニンゲン大学（オランダ）の北方圏の人類史生態史研究についての研究者交流の展開

上記の事業を通じて、本プロジェクトの既存のネットワークの拡大と促進を図る。

<学術的観点>

北方圏の人類生態史のキーワードを、（１）集団移動と拡散、（２）海洋適応、（３）先住性にしぼり、北方圏の人類社会の歴史的特性を中緯度圏の都市文明史と対比することで描きだす。理論形成のための基礎資料としては、平成25年度から進めている（a）地域集団の系統性、（b）安定同位体分析や生活誌解析、（c）資源利用の地域的多様性、（d）景観創造

の事例の諸項目についての基礎的データの蓄積を継続する。

北方圏の人類生態史の枠組みを広く国際的に提示するために5月のアルバータ大学（カナダ）における「北方圏の人類生態史」に関するセミナーとオックスフォード大学（連合王国）における「先住性と先住民文化遺産」に関する国際シンポジウムの成果を論文集としてとりまとめる。

<若手研究者育成>

（１）若手研究者向けの教育プログラム

国際フィールドスクールにおける国内外の研究者によるランチョンセミナーの企画実施を平成25年度に組織した大学院生のグループに委任し、国際共同研究の運営形態を学ぶ実践的プログラムを提供する。引き続き海外拠点とも連携した国内外の研究者の協力による複数指導体制の構築を進める。

（２）国際共同講義の実施

平成25年度につづき、オックスフォード大学での北方圏の人類生態史に関連する授業展開をおこなう。同様の企画は、アバディーン大学においても企画中である。

（２）海外拠点も含めた大学院生やポスドクの研究ネットワークの構築

プロジェクト内部での若手研究者の交流を促進するほか、現在組織の構築が進んでいる、フランス、オーストリア、カナダ、アメリカ、日本の研究者グループが参画する環太平洋研究ネットワーク（仮称）への若手研究者の参画を支援する。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

（１）地域社会への研究成果の還元

プロジェクトメンバーによる公開講座の企画など一般向けにわかりやすく、先端研究の課題や成果を解説する機会を積極的に展開する。プロジェクト事業の一環として来日する海外研究者による一般向けの講演会を企画実施し、プロジェクトの取り組みの周知に取り組む。また北海道大学が毎年秋に実施するサステナビリティ・ウィークの事業と連携して、プロジェクトテーマと連携した一般向けシンポジウム企画を実施する。

（２）国際的な先住民文化遺産の理解促進

アイヌ文化を初めとする北方圏の先住民文化や文化遺産の課題やその人類史における重要性を周知するための取り組みを海外の研究拠点と連携して実施する。狩猟採集民から現在の先住民文化に至る人類史資料は、欧米の主要博物館の中核的資料として収蔵活用されてきた。これらの保全管理と将来的な先住民を巻き込んだ活用のプログラムの創設にむけた取り組みを始める。この事業の実施には、国内外のプロジェクトに参加している研究者メンバーに加えて北海道アイヌ協会をはじめとする先住民組織や段階との連携を推進し、研究成果の地域社会や高等教育への還元を積極的に実施する。

8. 平成26年度研究交流計画状況

8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成25年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名	(和文) 北方圏における人類文化・環境適応・景観創造 (英文) Human Culture, Adaptation, modified Landscape in the North				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授 (英文) KATO Hirofumi, Center for Ainu & Indigenous Studies, Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) (1) Andrzej WEBER, Department of Anthropology, University of Alberta, Professor. (2) Neil PRICE, Department of Archaeology, University of Aberdeen, Professor.				
参加者数	日本側参加者数	36名			
	(カナダ)側参加者数	32名			
	(連合王国)側参加者数	57名			
26年度の 研究交流活動 計画	<p>カナダと連合王国の研究者の参画を得て、北方圏の人類史の特徴を中緯度圏の都市文明史と対比し、その独自の人類史的意義と特徴を検討するための共同研究を展開する。事業2年目である26年度は、1)カナダ側が実施しているシベリア大陸内部の狩猟採集民社会の環境適応行動に関する研究と日本列島に代表される海洋隣接地域における狩猟採集民社会の相違点を比較検討する。2)上記の比較研究を具体的に検証するための安定同位体分析や生活誌解析、古代遺伝子解析に関する基礎資料の蓄積をはかる、3)北方圏の人類文化の鍵となる研究項目である生活資源の家畜化・海洋適応・集団移動と拡散・景観創造の諸項目を検討する理論考古学・人類学の共同研究を継続して推進する。</p>				
26年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	<p>25年度の段階で本プロジェクトも含めた広域の環太平洋圏の狩猟採集民社会の長期的な変遷を比較研究する研究者ネットワークの構築が進みつつある。26年度に本プロジェクトの下で実施される国際共同研究の積み重ねによって地域的に展開され、把握されてきた研究成果と課題の統合や新たな研究課題の創出が可能となることが期待される。また人間集団の移住と拡散は、北方圏に限らないグローバルな人類史研究の課題であり、気候変動との関係性も含めて、人間集団の移動と拡散という人類を特徴付ける環境適応行動についての人類史的な検討を行う、より大規模な国際共同研究にむけた議論の広がりが期待できる。</p>				

整理番号	R-2	研究開始年度	平成25年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名	(和文) 北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来 (英文) Past and Future on Indigenous Cultural Properties for the Human History in the North.				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授 (英文) KATO Hirofumi, Center for Ainu & Indigenous Studies, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) (1) Chris, GOSDEN, School of Archaeology, University of Oxford, Professor (2) Neil PRICE, Department of Archaeology, University of Aberdeen, Professor.				
参加者数	日本側参加者数	36名			
	(カナダ)側参加者数	32名			
	(連合王国)側参加者数	57名			
26年度の 研究交流活動 計画	民族資料の博物館での組織的な収集は、ヨーロッパ諸国において始められた。今日でも世界の主要な博物館施設は、北半球の欧米諸国に集中している。26年度は、特に連合王国の主要な3つの博物館である大英博物館、国立スコットランド博物館、オックスフォード大学ピットリバース博物館に収蔵されているアイヌコレクションを初めとする先住民族の民族資料についての収集経緯、コレクション特性の比較考察を行う。この作業は、25年度の北方圏の人類史を文明史の視座と対比することから評価し、批判的に検証する作業を継承するものである。また先住民族が博物館コレクションにアクセスするためのフレームづくりも含めて共同研究を進める。				
26年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	研究活動における脱植民地的の取り組みは、フィールドのみではない。ある意味で世界のあらゆる地域の資料を集積し、公的に発信してきた連合王国の博物館は、あたかも西洋中心主義を批判的に検討するための最適なフィールドである。一方で積極的に世界各地の先住民族とのコラボレーションを生み出している実績も有している。プロジェクトが橋渡しとなり、新たな先住民文化遺産の活用の方法の実験的な取り組みを提示することが可能である。 またサステイナブルな資源利用に関心が集まる中で、先住民による資源利用を今日の資源利用に応用する取り組みが北米北西海岸からアラスカにかけて見られる。本共同研究に対して、これまで別個に展開していた他の環境科学や社会学のプロジェクトより課題共有の申し出があり、26年における研究交流の拡大が期待できる。				

8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「礼文島国際フィールドスクール」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “International Field School in Rebun Island “
開催期間	平成 26 年 8 月 1 日 ~ 平成 26 年 8 月 31 日 (31 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 日本国、礼文町、浜中遺跡群
	(英文) Hamanaka site complex, Rebun, Japan
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 長沼正樹・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・特任助教
	(英文) NAGANUMA Masaki, Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University, Specially appointed assistant professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Andrzej WEBER, Department of Anthropology, University of Alberta, Professor

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	15 / 450	
	B.	28	
カナダ 〈人／人日〉	A.	5 / 150	
	B.	20	
連合王国 〈人／人日〉	A.	4 / 120	
	B.	2	
合計 〈人／人日〉	A.	24 / 720	
	B.	50	

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	<p>1) 歴史文化遺産の複合性を理解する。2) 考古遺跡が過去の環境情報や人類と動植物など生態系との相互作用が累積した結果、形成されたものであることを実践的に学ぶ機会を提供する。3) 良好に保存された各種データを効率的に収集し高精度の調査機器により遺跡情報を包括的に記録する手法を学ぶ。4) カナダと連合王国、そして日本を主体とする多領域のチームメンバー研究者と学生が参画し、それぞれの研究の核となる一次資料の収集方法と記録保存に関する最先端の手法について議論をおこなう。</p> <p>今年度実施する高精度調技術の項目は、①GIS 搭載測量機材、②3D スキャナによる電子測量法、③地中探査レーダによる遺跡探査である。なお今年度はプロジェクト以外で北海道大学全学教育、東京大学理学部、アルバータ大学人類学部の野外実習を受け入れる予定である。</p>																	
期待される成果	<p>30 名近い国内外の研究者や学生が共同で長期間にわたり調査研究に従事することで本事業の中核的課題である国や機関の単位を越えた研究組織の構築が促進されることが期待される。高精度の調査機器の操作技術や、それを応用した調査分析手法の習得を通じて、遺跡の潜在的な価値を探求し、将来的な文化資源としての活用計画を地元自治体に提言することができる。国内外の研究者による複数指導体制により個別の大学単位では不可能な国際的な教育活動をフィールドにおいて実践することができ、次世代を担う若手研究者にとっての貴重な機会を提供することになる。</p>																	
セミナーの運営組織	<p>北海道大学の拠点メンバーを中心に長沼正樹特任助教をフィールドマスターとし、ポスドクや院生によるフィールドスクールの支援体制を組織する。海外と北大の実習生は、加藤と深瀬が担当し、地域社会や市民向けプログラムは岡田が担当する。また実習とした受け入れる大学生については、アルバータ大学と北海道大学の院生は、実習生に対して TA としての役割を担う。</p>																	
開催経費 分担内容 と概算額	日本側	<table border="0"> <tr> <td>内容</td> <td>国内旅費</td> <td>金額</td> <td>4,000,000 円</td> </tr> <tr> <td></td> <td>備品・消耗品購入費</td> <td></td> <td>200,000 円</td> </tr> <tr> <td></td> <td>その他</td> <td></td> <td>754,000 円</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>合計</td> <td>4,954,000 円</td> </tr> </table>	内容	国内旅費	金額	4,000,000 円		備品・消耗品購入費		200,000 円		その他		754,000 円			合計	4,954,000 円
内容	国内旅費	金額	4,000,000 円															
	備品・消耗品購入費		200,000 円															
	その他		754,000 円															
		合計	4,954,000 円															
	(カナダ) 側	<table border="0"> <tr> <td>内容</td> <td>外国旅費</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>備品・消耗品購入費</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	内容	外国旅費				備品・消耗品購入費										
内容	外国旅費																	
	備品・消耗品購入費																	
	(連合王国) 側	<table border="0"> <tr> <td>内容</td> <td>外国旅費</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	内容	外国旅費														
内容	外国旅費																	

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「北方人類生態史セミナー」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Seminar on the History of Human Ecology in the North Field School “
開催期間	平成 26 年 5 月 4 日 ~ 平成 26 年 5 月 8 日 (5 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) カナダ、エドモントン、アルバータ大学
	(英文) University of Alberta, Edmonton, Canada.
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授
	(英文) KATO Hirofumi, Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Andrzej WEBER, Department of Anthropology, University of Alberta, Professor

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (カナダ)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	8/ 40	
	1	
カナダ 〈人／人日〉	14/ 70	
	6	
連合王国 〈人／人日〉	3/ 15	
	0	
合計 〈人／人日〉	25/ 125	
	7	

- A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）
 B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>北方圏の人類生態史に関する理論的枠組みを構築するために、通常個別の研究テーマに取り組んでいる人類学、遺伝学、生物学、同位体科学、考古学の研究者が合同で討議を行うことを目的として開催する。カナダ側は主として、シベリア圏における先史時代の狩猟採集民研究に取り組んでおり、異なる地域環境の中での適応行動を議論する最良の機会となる。連合王国の研究者は、世界各地の北方圏の狩猟採集民のデータの分析に精通しており、比較研究を行う上で重要な基礎データと地域的変異に関する重要な提言を行う予定である。これらを統合し、今後の研究計画を再構成する機会を創出する予定である。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>カナダ（一部アメリカの研究者を含む）、イギリス、日本の異なる地域で研究活動を行う多領域の研究者が一同に介して、研究状況や基礎資料の共有を図ることは、さらなる共同研究のアイデアや具体的な地域性の変異についての情報共有を図る上で重要である。今回のセミナーにおいては、地域性を踏まえた上での普遍的なモデルづくりに向けた研究集会として各研究者にとって重要な意見交換の機会が提供されることが期待できる。また参加する院生にとっては、国際的なレベルでの研究内容についての有益な示唆を受ける重要な機会となる。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>セミナーの運営主体は、アルバータ大学の人類学部のスタッフが Andrzej WEBER 教授の指示のもと運営の中心を担う。日本側の参加メンバーの選出は、本プロジェクトの事務局である北海道大学アイヌ・先住民研究センターが担い、カナダ側と調整を行いつつ、セミナー企画をおこなう。</p>	
<p>開催経費 分担内容 と概算額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 外国旅費 金額 1,800,000 円 外国旅費・謝金等に係る消費税 144,000 円</p>
	<p>(カナダ) 側</p>	<p>内容 国内旅費 会議開催経費</p>
	<p>(連合王国) 側</p>	<p>内容 外国旅費</p>

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「先住民考古学国際セミナー」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Seminar on the Global Indigenous Archaeology“
開催期間	平成 26 年 12 月 10 日 ～ 平成 26 年 12 月 14 日 (5 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 連合王国、オックスフォード、オックスフォード大学
	(英文) University of Oxford, Oxford, UK.
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授
	(英文) KATO Hirofumi, Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Chris GOSDEN, Institute of Archaeology, University of Oxford, Professor

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (連合王国)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	6/ 30
	B.	2
連合王国 〈人／人日〉	A.	17/ 70
	B.	10
〈人／人日〉	A.	
	B.	
合計 〈人／人日〉	A.	23/ 100
	B.	12

- A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）
 B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本セミナーでは、先住民を規定する重要な概念である「先住性」について議論を行う。「先住性」をめぐるこれまでの議論は、北米やオセアニアの事例を基礎としてなされてきた。近年では、アフリカやアジアをはじめとして「先住性」の多様性を論じる傾向が強まっている。集団形成の多重性がみられ、文化的アイデンティティにおいても多様性をもつブリテン島の事例を基礎として、日本列島の状況との比較を行うことで、「先住性」の多様性についての議論を行う。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>ヨーロッパは、長期にわたる集団の移動と文化的な重層化が文化的多様性を生み出してきた。言語をはじめとして地域的な文化的アイデンティティと「先住性」の対比は、従来の「先住性」の議論とは異なる枠組みをもつ刺激的な試みである。極めて限定された島空間において累積される集団の往来の中で「先住性」をどのように議論することができるのかという斬新な議論が期待できる。この議論を通じて新たな「先住性」についての概念定義が導かれる可能性を期待する。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>本セミナーは、Chris GOSDEN 教授をはじめとするオックスフォード大学考古学研究所のスタッフによって企画運営される。日本側からの参加者の選抜や討議課題の整理については、プロジェクト事務局であるアイヌ・先住民研究センターのスタッフが協力して準備する。</p>	
<p>開催経費 分担内容 と概算額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 外国旅費 金額 1,700,000 円 外国旅費・謝金等に係る消費税 136,000 円</p>
	<p>(連合王国) 側</p>	<p>内容 会議開催経費</p>
	<p>() 側</p>	<p>内容</p>

整理番号	S-4
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「生物人類学セミナー」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Seminar on Bio-archaeology“
開催期間	平成 27 年 1 月 10 日 ～ 平成 27 年 1 月 14 日 (5 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 連合王国、オックスフォード、オックスフォード大学
	(英文) University of Oxford, Oxford, UK.
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 石田肇・琉球大学大学院医学研究科・教授
	(英文) ISHIDA Hajime, Graduate School of Medicine, University of Ryukyus, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Rich SHULTING, Insitute of Archaeology, University of Oxford, Lecture

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (連合王国)	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	6 / 30	
	B.	0	
カナダ 〈人／人日〉	A.	1 / 5	
	B.	0	
連合王国 〈人／人日〉	A.	5 / 25	
	B.	5	
合計 〈人／人日〉	A.	12 / 60	
	B.	5	

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
 B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>北方圏では、長期的に狩猟採集経済に基盤をおいた生活様式が持続された。この過程において人類集団は、生業経済のみではなく、その行動様式や生活サイクルにおいて地域環境に適応してきた。本セミナーの目的は、生活誌痕跡から復元される北方圏の人類集団の環境適応行動（活動の性差、年齢差、食性差、環境差を含む）についての多角的な議論を展開し、かつまた地域的変異のデータを共有することを目指して企画実施するものである。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>北方圏の狩猟採集民の生業活動や生活様式については、19世紀以降の民族誌として膨大な資料が残されている。骨学的な検討は、安定同位体分析の手法の発達を組み合わせることでより客観的な生活誌復元を可能にしている。蓄積されてきている地域的多様性の比較を通じて、北方圏の狩猟採集民の地域的多様性と、時代的変遷を推定することが可能になる。古気候の変動の復元も含めて、環境変化に対する狩猟採集民の適応行動の多様性が提示されることが期待できる。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>本セミナーは、オックスフォード大学考古学研究所の Rick SHULTING 博士を中心に企画運営される。日本側については、連携機関である琉球大学大学院の石田肇教授と北海道大学大学院医学研究科の深瀬均特任講師とが中心となり、参加メンバーの調整と討議議題の整理を行う予定である。</p>	
<p>開催経費 分担内容 と概算額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 外国旅費 金額 1,400,000 円 外国旅費・謝金等に係る消費税 112,000 円</p>
	<p>(カナダ) 側</p>	<p>内容 海外旅費</p>
	<p>(連合王国) 側</p>	<p>内容 会議開催経費</p>

整理番号	S-5
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「文化遺産国際セミナー」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Seminar on the International Cultural Heritage Issues”
開催期間	平成 27 年 2 月 10 日 ～ 平成 27 年 2 月 14 日 (5 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 連合王国、ノリッチ、イースト・アングリア大学 (英文) University of East Anglia, Norwich, UK.
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 岡田真弓・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・博士 研究員 (英文) OKADA Mayumi, Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University, PhD Research Fellow
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Akira MATSUDA, School of Art History and World Arts Studies, University of East Anglia, Lecturer

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (連合王国)
日本 〈人／人日〉	A.	5/ 25
	B.	0
連合王国 〈人／人日〉	A.	6/ 30
	B.	5
〈人／人日〉	A.	
	B.	
合計 〈人／人日〉	A.	11/ 55
	B.	5

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>北方圏の文化遺産が景観創造と結びつきながらどのように文化資源として活用していくことができるのかを議論する。北方圏の景観は、地域ごとの植生や人為的に創り出されていく景観創造によって多様性を生み出している。一方で可視化されにくい人為的な改変を伴わない先住民文化遺産についても近年議論が高まっている。本セミナーでは、北方圏の文化遺産の抱える課題について多角的に議論することを目指している。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>景観研究は、連合王国において長い研究の蓄積があり、ヘリテージ（遺産）研究として確立されている。一方で従来の文化遺産研究には、可視化されにくい先史時代の文化遺産や先住民文化遺産をどのように評価しているのかという課題も提起されている。ブリテン島の文化的景観の研究蓄積と日本列島における文化的景観を含む文化遺産の研究蓄積を対比し、さらに先住民文化遺産の特性を交えた複合的な議論を展開することが可能となる。これによって新たな文化遺産研究の枠組みが構築されることが期待できる。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>本セミナーは、イースト・アングリア大学の Akira MATSUDA 博士を中心に連合王国の研究者によって企画運営される。日本側の参加者の選抜と議論の論点の準備は、本プロジェクトの事務局であるアイヌ・先住民研究センターのスタッフによって調整準備される。</p>	
<p>開催経費 分担内容 と概算額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 外国旅費 金額 850,000 円 外国旅費・謝金等に係る消費税 68,000 円</p>
	<p>(連合王国) 側</p>	<p>内容 会議開催経費</p>
	<p>() 側</p>	<p>内容</p>

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣時期	用務・目的等
北海道大学・教授・加藤博文ほか18名	日本・西原町・琉球大学	2014年4月	プロジェクト参加国内メンバーによる全体会議（H26年度事業の打合せ）
北海道大学・教授・加藤博文	カナダ、バーナービー・サイモン・フレージャー大学	2014年5月	共同研究 R-2「北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来」に関する次年度セミナーの打合せ
慶応義塾大学・大学院生・平澤悠	連合王国・オックスフォード・オックスフォード大学	2014年12月	オックスフォード大学 Petraglia 教授の下での共同研究 R-1「北方圏における人類文化・環境適応・景観創造」に関する集団移動と拡散に関する指導助言を受けるため
山梨大学・教授・安達登	連合王国・オックスフォード・オックスフォード大学	2015年1月	古代DNA研究と民族形成過程に関する特別講義
北海道大学・教授・加藤博文	連合王国・オックスフォード・オックスフォード大学	2015年2月	北海道の先史文化および先住民文化遺産に関する大学院生むけのチュートリアルの実施とアイヌ考古学に関する講義
北海道大学・教授・加藤博文	連合王国・アバディーン・アバディーン大学	2015年3月	オホーツク文化と海洋適応に関する講義
北海道大学・教授・加藤博文	連合王国・ノリッチ・イースト・アングリア大学	2015年3月	アイヌ研究の学史的背景に関する講義（センズベリ日本芸術研究所において）

9. 平成26年度研究交流計画総人数・人日数

9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人／人日〉	カナダ 〈人／人日〉	連合王国 〈人／人日〉	合計 〈人／人日〉
日本 〈人／人日〉		9/45 (1/5)	15/110 (2/10)	24/155 (3/15)
カナダ 〈人／人日〉	5/150 (21/780)		0/0 (0/0)	5/150 (21/780)
連合王国 〈人／人日〉	4/120 (0/0)	0/0 (3/15)		4/120 (3/15)
合計 〈人／人日〉	9/270 (21/780)	9/45 (4/20)	15/110 (2/10)	33/425 (27/810)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

9-2 国内での交流計画

18/558 〈人／人日〉

10. 平成26年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	6,000,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	7,450,000	
	謝金	0	
	備品・消耗品 購入費	200,000	
	その他の経費	754,000	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	596,000	
	計	15,000,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		1,500,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合 計		16,500,000	